

## かえつ有明高等学校・中学校見学の感想

2018年12月19日に、東京都のかえつ有明中学校・高等学校を本校図書情報部のメンバー7名で見学しました。以下はその感想です。参加した先生方の率直な感慨を生かすため、あえて原文のまま掲載致します。重複する部分も多く、読みにくい面も多々あるかと思いますがご容赦下さい。

今回の見学に際して、お忙しいにも関わらずお時間を割いていただいた、かえつ有明高等学校・中学校の前嶋正秀先生、佐野和之先生、山田英雄先生に御礼申し上げます。今回の見学を、本校の未来に繋げるよう努力してまいります。

主任 今中 俊久

秋吉 和紀 (国語科)

さる12月20日(水)、図書情報部7名で視察のため「かえつ有明中・高等学校」にお邪魔をした。「学制改革以来の大改革」と言われる「高大接続改革」や、それに伴う「中・高等学校の指導要領の改定」が待ったなしで進む中、独自の教育プログラムを構築し、全国的に注目を集めている学校が、この「かえつ有明中・高等学校」である。

まず見学する中で私が注目したのは、米国式の「クリティカル・シンキング」をベースにした思考方法の体系的習得、実践を中学校の段階で行っていることである(「サイエンス科」と銘打った思考トレーニングの教育課程が組織化されている)。情報の収集・整理→情報の整理・分類→情報の知識化→複数の情報の分析・統合…等々、中学校各学年の発達段階に応じて、徹底したトレーニングを行っていることが強く印象に残った。特に私が面白く感じたのは、その学習段階それぞれに応じて、テーマの異なったオリジナルな冊子形式のテキストが作成されていることである。このテキストを教科の枠組みを越えて教員がアイデアを出し合いながら作成することによって、「情報共有」以上に「学校の目指すべき教育イメージの共有」が図られているのだと、私は感じた。また、こうしたテキストの作成や教育実践の構築にあたって、それぞれの教員が学外の研修や講習等で得た知識を積極的に学内に還元する姿勢にも感心した。それぞれ新たに知り得た知識を教員相互で並列化し、学校全体の知の体系がアップデートされていく。こうした積極的かつ柔軟な姿勢が、教員だけではなく生徒にも浸透している様子を、ご案内いただいた先生方のお言葉からうかがい知ることができた。

新学習指導要領を端的に表現する言葉として「TeachingからLearningへ」というものをよく耳にするが、この言葉が示すように、これからの教育実践のあり方は、良く知っている授業者が何も知らない学習者へ教えるものではなく、授業者も学習者も、授業に関わる全ての者が、何らかの「真理」に向かって、協働して知を探求していくものであろう。「かえつ有明」の先生方がご案内の中で「うちも完璧ではないし、完璧を目指すというのもまた違う」、「我々が視察に来た皆さんに教えるというより、お互いに学びがあれば良い」という言葉をしきりにおっしゃっていた。「かえつ有明」の先生方のこうした言葉や姿勢が、「かえつ有明中・高等学校」が昨今の教育改革の中でトップランナーとなっていることの何よりの証左となっていると私は感じた。

紙幅の限界と私の表現力の限界とのために、「かえつ有明中・高等学校」の魅力の全てを伝え切れてはいないが、私が伝えきれていない部分は他の視察された先生方に譲ることにしたい。最後に、この視察を終え私自身が昂揚感(ワクワクする気持ち)を覚えたことだけを申し添えて、この報告を終えたいと思う。

上垣 尚吾（保健体育科）

かえつ有明中・高等学校を訪問した。初めにかえつ有明中・高等学校の先生方の取り組みについての話を聞かせてもらう前に、先生方の発案でチェックインというアイスブレイクのゲームを始めた（自分の悩みや相手に考えてほしいことを思いついた人から発言するゲーム）。このゲームを進める中で、お互いが学校で取り組んでいることに話題が変化していき、かえつ有明中・高等学校で取り組まれていることについて聞くことができた。また、どのような考え方で取り組んできたのか、実践事例を聞くことができた。

・アクティブラーニングについて、

中学生から段階的にモデルコアカリキュラムを作り学校全体で実践している。

PC教室・ドルフィンセンターでアクティブラーニングが行える環境づくりが整っていた。

（生徒が話し合いながら、取り組める机や椅子が設置されている）

・アクティブラーニングに特化したクラスがある。



様々な取り組みや実践例を聞く中で、一番大事なことは教員（自分自身）が変わることだと感じた。教員自身が取り組み方や実践を変えていく中で、周りが変わっていくという過程を、かえつ有明中・高等学校の先生方は大事にしていた。

今後学校が変わっていくためには、環境面の改善やアクティブラーニングを行いやすい施設を作ることも大事かもしれないが、それぞれが今の取り組み方と向き合い、改善・変化させていくことが大切であると思う。

川崎 久理子（保健体育科）

かえつ有明中・高等学校では、サイエンス科とプロジェクト科という特殊な学科がある。そこでは、考える力を重点的に育成されている。中学生の普段の生活では、なかなか幅広く捉えてものごとを考え深めていくことはできない。本校の中学生に足りていない部分でもある。日頃の学校生活などで失敗し、壁にぶち当たったときにも活かしていける。

ものごとをあらゆる面から捉えて学ぶためには、図書館の役割はとても重要だが、かえつ有明中・高等学校は図書の種類、インターネットを使える環境、そしてグループでディスカッションする場所のいずれもが充実していた。見学したときも、生徒たちがたくさん活用していた。また、考え方のワークシートもあらゆる場所に設置されていて、生徒たちが自由に使えるようになっていた。

## 瀬野 貴之（国語科）

かえつ有明中・高等学校を視察させていただき、感銘を受けたのは、アクティブ・ラーニングの本質を追求されようとしている姿勢であった。

アクティブ・ラーニングは、ともすればその手法論のみで語られることが多い教育方法である。しかしかえつ有明高校は、非常に精力的に「アクティブ・ラーニングで生徒に身につくものは何か」を研究されているようだった。その姿勢を体現した「サイエンス科」としての取り組みは、非常に刺激的なものであった。論理的思考法とそのアウトプットまでを包括したトレーニングを、中高6年間をかけてしっかりと行うその学びの方法論は、非常に完成されたもののように感じたのだが、「まだまだ模索の途中」とおっしゃられたのが印象的であった。

私がかえつ有明中・高等学校から最も強く感じ取ったことは、まさにこの「模索の途中である」という言葉によく表れている。それは「教員自身が何を学び、どう成長して行くのか」を自らに問うことを大切にしておられる、ということである。実際にお話をお伺いした3名の先生方はもちろん、会話の中から、その背後に「自らの成長」を大切にしておられるたくさんの先生方の存在がありありと伝わってくるようであった。

我々教員は往々にして、過去の成功体験にとらわれ、その方法に固執してしまうことがある。しかし現代のような変化と多様化が目まぐるしく起こる時代の中で、果たしてそれはいつまで優れた方法だと言えるのだろうか。自分のやっていることを「まだまだ模索の途中」と最後まで言い続けられることは、この時代の中でとても大切なことではないか、そう思われた時間であった。

## 高坂 雄一郎（社会科）

東京都江東区に所在する共学の私立の中高一貫校。日本初の女子商業高校としても知られるかえつ有明中・高等学校では、独自の教育プログラムが実践されていた。その中で、特に目を引いたのが情報センター「ドルフィン」と「サイエンス科」の2点である。

ドルフィンには、図書館とコンピュータ室があり、情報リテラシーを養育する学習環境が整備されていた。図書館司書を中心に、生徒が活用しやすい工夫が随所にみられた。図書館と言えば「静かに活動する」イメージであるが、ドルフィンはその逆で、グループワークやコミュニケーションの場として活用されている。司書との情報共有や密な連携体制が印象的であった。

サイエンス科は、論理的思考力の育成を、教科と連携をしながら実施している。教科の枠を超えて、思考ツールを活用しながら考える力を養っているようだ。中高一貫校のメリットを生かし、中学1年～高校3年へとつながりがみられる。カリキュラム作成においての先生方のご尽力がこれを実現させている。

関大一中・一高の実情と比較させて考えてみると、図書館の機能の見直しが必要であると考えられる。文献の検索や自習室としての利用にとどまらず、図書館をグループワークなど対話的な学びを実践するための中心の場所として位置づけ、機能を充実させていくことの必要性を感じた。また、「サイエンス科」のような、“生徒にこんな力を身に付けさせたい”というビジョンを持ち、本校独自の学びを実践することで「学校の特色」を出すことができるであろう。

かえつ有明中・高等学校への訪問を通して、「先生方の熱意」と「学校の特色」が学校の在り方を決めていく大切な要素であると感じた。ドルフィンを活用した授業やサイエンス科等の特色があり、実践していく先生方の熱意がそれを生み出しているように思う。指導実践の検証と改善を繰り返し、今の環境をつくってこられたと思うと、その道のりは大変なものであったと想像してしまう。関大一中・一高にも、我々教員が「一高はこんなことをやっています」と共通して言えるような特色が必要であると痛感した。

最後に、校務ご多忙の中、丁寧に対応して頂いた先生方、大変お世話になり、ありがとうございました。

中村 真一（社会科）

2022年4月より高等学校の学習指導要領が改訂される。この改訂において、今までの教育から大きな変化が求められている。それに対応するためには、ICT教育のための環境整備など、ハード面の整備が必要不可欠であると私自身考えていた。しかし、今回図書情報部員として、かえつ有明中・高等学校を視察して、山田教諭と佐野教諭から「サイエンス科」での取り組みについてお話を聞かせていただき、ハード面の整備以外にも図書室との連携や教員同士が協力することでカバーできるということを知ることができた。今でもチャレンジし続け、自分たち自身の「在り方」と向き合い、自分自身を整え続けることが重要であると刺激を受けた。こういった取り組みについては、本校は関西大学の併設校という環境を考えると、もっと積極的に取り組んでいく必要があると感じた。